

稲城市の包括的な支援体制

～重層的支援体制整備事業を活用したチーム支援～

稲城市福祉部生活福祉課 菅野 遙奈

1. はじめに

従来の福祉支援は、年齢や属性に応じた専門機関の設置を軸に発展してきた。しかし、近年では家庭内の課題が複数絡み合い、従来の制度では対応が難しい事例が増えている。また、どの支援制度にも該当しない相談者への対応も課題となっている。これらに対応するには、複数分野の連携により世帯全体を支える包括的な体制が必要である。令和3年度創設の重層的支援体制整備事業（以下「重層事業」）は、社会福祉法に基づき、「相談支援」「参加支援」「地域づくり」を一体的に進めることで包括的支援を目指すものだ。稲城市は令和6年度からこの事業を導入し、課題解決と連携強化に向けた取組を進めている。

2. 検討経過

重層事業は地域の必要性に応じて実施される任意事業である。稲城市においても、この事業が必要かどうかの議論を行った。

稲城市は人口9.4万人程度と決して大きいまちではなく、支援機関間の連携や顔の見える関係づくりは進んでいるというのが庁内関係者の評価だった。一方で、事業検討のために行った支援機関へのアンケートでは、「連携が難しい」といった意見も一定数確認された。保健福祉総合計画の策定委員会や庁内検討委員会の中で検討した結果、3年間での見直しを前提として、事業を開始することとした。

3. 主な取組

以下、稲城市の取組を一部紹介する。

1) 稲城市社会福祉協議会との協働

事業開始に伴い、稲城市では、稲城市社会福祉協議会（以下「社協」）の専門職2名を市役所生活福祉課に常駐させ、事業を一部委託し、市と社協との協働実施という形をとった。

①多機関協働事業

支援機関からの相談を受けて、課題の整理や支援の役割調整を行うもので、本事業において最も重要視している。社会福祉法に基づく支援会議を設置し、支援に関する本人同意がとれない方に対して、会議の構成員に守秘義務を課すことで、情報の共有や支援方針の検討を行っている。

②アウトリーチ

社協の重層担当はアウトリーチの役割も担っており、他の支援機関と役割分担をしながら、相談者への訪問や受診同行等を行っている。

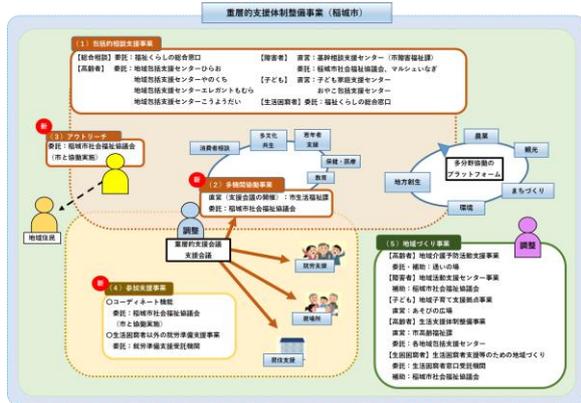
2) 福祉の総合窓口の設置

各分野において相談窓口が設置されているが、どこに相談したらよいか分かりづらい相談があり、市民がたらい回しになってしまう事例がしばしばみられた。

この課題意識から、生活困窮者の自立相談支援機関に福祉の総合相談機能を追加し、「福祉くらしの総合窓口」としてどこに相談したらよいかわからない相談の受け止めを開始した。

3) 全世代型地域づくりの推進

稲城市では、地区ごとの課題について話し合う「生活支援・介護予防サービス協議体」が全地区に設置されている。元々は高齢者が主体の会議体だったが、少しずつ世代や分野を超えた検討を進めている。重層事業を開始するにあたり、新たな会議体は作らず、この場を活用しており、重層担当も参画している。



出典：稲城市重層的支援体制整備事業実施計画

4. 事業から見てきたこと

事業開始から1年半が経過した現在、社協の重層担当には様々な相談が寄せられている。

令和6年度の相談傾向としては主に以下のとおりである。

- ①世帯の中で、多くの課題を抱えている世帯
- ②18～64歳で諸手続きに課題がある世帯
- ③高齢者の支援者からつながる 8050 世帯の 50 側への支援
- ④福祉分野以外との連携が必要なケース
- ⑤適当な支援方法に関し、複数の機関で検討したケース

これらの事例ごとに各世帯の状況を整理し、必要に応じて支援会議の場を設定するなどして、関係者と役割分担や支援方針の検討を行った。また、会議後も関

係機関からの情報の集約をするなど、支援経過の確認も行っている。

5. おわりに

重層事業で目指しているのは、難しい世帯の対応だけでなく、そこから地域課題を分析し、体制整備につなげることである。

稲城市では、分野を超えた関係構築を進めるため、全体会を年に4回開催しており、重層事業で対応した事例の共有や意見交換を行っている。今後も関係機関と連携し、事例を積み上げる中で課題解決を進め、包括的な支援体制を推進していきたい。

最後に、保健医療福祉関係者に以下の点への協力を呼び掛ける。

1) どこに相談したらいいか困っている、悩んでいる方を見かけたら

『福祉くらしの総合窓口』（市役所2階）ご案内ください。

2) 支援世帯で分野外の課題や多機関連携が困難な場合には

『重層担当』（生活福祉課地域福祉係）へご相談ください。

3) 稲城市より、複合的な課題を抱える世帯に対する「支援会議」への参加を求める場合があるので、ご協力をお願いしたい。

本フォーラムが保健医療福祉関係者との連携をさらに深める場になることを期待している。